

「時の流れ」 利尻町立利尻中学校3年 松野 朔丞

15年と五か月。これは僕が今まで生きてきた時間。

三年。これは僕が中学校で過ごしてきた時間。

最初に述べた15年という人生の時間は、まだ五分の一くらいなのに、中学校で過ごした時間はもう終わりに近づいている。僕が生きた15年の中で思い出せる思い出は半分もないが、この3年間は少なくとも人生よりは覚えている。いま書いたことでは伝わりにくいと思うが、僕にとってこの中学校生活は死ぬ直前まで覚えているだろう。

中学校生活を送ってみて、「他の委員会でも楽しかったのかな」とか「もっと勉強していればよかったな」など、どうでもいいことを思い返してしまう。そんなことよりも、体育祭や修学旅行などの楽しかったことの方が、僕はより鮮明に思い出せる。僕は確かに3年間中学校生活送ったはずなのに、この3年間でたった1年のように感じてしまう。やっぱり楽しい時間というのは、あっという間に過ぎてしまうのかもしれない。

これは僕個人の話になるが、僕の家族は転勤族なのでこんなに長くここに入れたのは、運が味方してくれたに違いない。もし、途中で引っ越ししていたらロクに友達もできず、本当につまらない人生を送っていたことでしょう。この学校の生徒数は都会の学校と比べると少ないが、だからこそフレンドリーで、個々の個性が光っているのだと思う。皆周りにどう思われているかはわからないが、僕はここにいることができてよかったと思う。

しかし、いつまでもそういうわけにはいかない。中学校を卒業すれば各々別々の高校に進学し、散り散りになる。それは僕も同じで、知らない人間しかいないところに進んでいかなくてもならない。引っ越しがなければ、地元に残った仲間たちと高校に行くことができるが、その可能性は極めて低い。ないといっても過言ではない。本当に離れ離れになると思うと寂しい。今までこのクラスで作り上げてきたことを思い出すだけでにやけてしまうような思い出、この寂しい、悲しいという感情すべてが僕の人生の死ぬまで忘れない宝物となるだろう。改めて言う。

このクラスでよかった。いままでありがとうございました。